

組織登録からみた広島県における中枢神経系腫瘍の組織型別検討

立山 義朗* 西 信雄 杉山 裕美 小笹 晃太郎
有田 健一 鎌田 七男 梶原 博毅 安井 弥

1. 目的

広島県腫瘍登録事業(いわゆる組織登録)のデータをもとに中枢神経系腫瘍の実態を知るための解析を行い、組織登録からみた広島県における中枢神経系腫瘍の実態として既に報告した¹⁾。今回も中枢神経系腫瘍の実態を知る目的で組織型別に検討した。

2. 対象と方法

既報¹⁾同様、広島県内の医療機関 60 施設の協力を得て、病理組織に関する資料を収集し、ICD-O-3 をもとにした部位と組織診断をコード化されたデータのうち、中枢神経系を原発とする腫瘍のみを対象とし、腫瘍の組織型別解析に主眼を置いて男女別、年齢別、部位別、年次別に検討した。

3. 結果のまとめ

1973 年から 2004 年までの間の中枢神経系腫瘍の新規登録総数は 5,262 例(男性 2,264 例、女性 2,998 例)であり、そのうち良性腫瘍は 3,377 例(男性 1,210 例、女性 2,167 例)、悪性腫瘍は 1,584 例(男性 903 例、女性 681 例)、性状不詳が 301 例(男性 151 例、女性 150 例)であった¹⁾。年齢階級別では良性腫瘍では男女とも 50 歳代をピークとした単峰性に分布し、悪性腫瘍では 60 歳代と 9 歳以下の 2 峰性を示したことも既報の通りである¹⁾。

全体の組織型別割合は髄膜腫瘍(髄膜皮細胞由来で性状不詳、悪性を含む)が 1,696 例(男性 442 例、女性 1,254 例)(32.2%)と最も多く、グリオーマ(星細胞系、上衣細胞系、希突起細胞系、脈絡膜細胞系、その他神経膠細胞由来の合計)が 1,303 例(男性 744 例、女性 559 例)(24.8%)と次いで多く、シュワン細胞腫瘍(悪性を含む)が 814 例(男性 396 例、女性 418 例)(15.5%)、下垂体腫瘍(悪性を含む)が 790 例(男性 313 例、女性 477 例)(15.0%)、悪性リンパ腫(髄外性形質細胞腫を含む)117 例(男性 62 例、女性 55 例)(2.2%)などと続いた。

男女別では、髄膜腫瘍、下垂体腫瘍は女性に、胎児性腫瘍、胚細胞腫瘍、血管腫、グリオーマは男性に多かった。

年齢別では、髄膜腫瘍、膠芽腫(グリオーマの一亜型)、シュワン細胞腫瘍、下垂体腫瘍、悪性リンパ腫、血管芽腫は成人に多く、胚細胞腫瘍、胎児性腫瘍は小児に多く、グリオーマ、頭蓋咽頭腫は成人と小児の両者に多かった。さらに、小児のグリオーマでは成人に比較し上衣細胞系腫瘍の比率が高く、小脳や脳室発生の比率も高かった。

部位別では、グリオーマ(特に膠芽腫)、悪性リンパ腫、血管腫は大脳に、胚細胞腫瘍は松果体部に、シュワン細胞腫瘍は脳神経、脊髄に、胎児性腫瘍、血管芽腫は小脳に多かった。

年次別割合では、髄膜腫瘍、下垂体腫瘍、

*独立行政法人国立病院機構 広島西医療センター 研究検査科
〒739-0696 広島県大竹市玖波 4-1-1

悪性リンパ腫は増加傾向にあり、グリオーマ、シュワン細胞腫瘍、頭蓋咽頭腫は減少傾向にあった。

4. 結論

広島県の組織登録データをもとに中枢神経系腫瘍の組織型別検討を行った。中枢神経系には多種多彩な組織型が存在し、組織型によって性、年齢、部位、年次推移に特徴がみられた。

5. 参考文献

1. 立山義朗、西 信雄、杉山裕美、有田健一、鎌田七男、梶原博毅、安井 弥：組織登録からみた広島県における中枢神経系腫瘍の実態、JACR Monograph No.15、38－43、2010